

西洋建築史第1回

序+ 「建築」の語源+ オリエント世界の建築

中島 智章

序.「建築の語源」

建築(当初は「造家」も) アーキテクチュア アーキテクト architecture, architect(英) バウクンスト バウキュンストラー アルキテクトゥーア アルキテクト Baukunst, Baukünstler, Architektur, Architekt(独)
アルシテクチュール アルシテクト architecture, architecte(仏)、アルキテットゥーラ アルキテット architettura, architetto(伊)、アルキテクトゥーラ アルキテクト architectura, arquitecto(西)・・・
アルキテクトゥーラ アルキテクトゥス architectura, architectus(羅) アルキテクトニケ テクネ architectonice techne, architecton(希) アルケ テクトン arche(原理、頭)+ tecton(工匠、職人)

DE ARCHITECTVRA, LIBRI DECEM

第1書に建築に対する基本的な考え方が記される

[fabrica(opus), ratiocinatio] = [quod クオド significatur, quod シグニフィカト significat]

[ordinatio(taxis), dispositio(diathesis), eurythmia, symmetria, decor, distributio(oikonomia)]

[aedificatio, gnomonice, machinatio]

[ratio × 3= firmitas, utilitas, venustas]

『建築十書』邦訳 ウィトルウィウス：『ウィトルウィウス建築書』、森田慶一訳、東海大学出版会、東京、1979年。

Ancient: 古代の= 西ローマ帝国滅亡まで、Medieval: 中世の= 東ローマ帝国滅亡まで、Modern: 近代の= それ以降

Antiquité: 古代、Moyen-Âge: 中世、Époque moderne= フランス革命まで、Époque contemporaine= それ以降

古代ギリシア・ローマ文明(「建築」の故郷)とその理想化された姿「古典古代」を奉じた時代・地域の建築を取扱う

欧州の中でもローマ帝国の版図が及んだことのある地域(ラテン世界+ 独英など)の古代、中世、近世の建築

日本建築学会編：『三訂版 西洋建築史図集』、彰国社、東京、第2版、1983年。

鈴木博之編：『図説年表 西洋建築の様式』、彰国社、東京、1998年。

初田亨：『模倣と創造の空間史』、彰国社、東京、1999年。

中島智章他7名：『図説テキスト 西洋建築史』、彰国社、東京、2005年。

1.古代メソポタミア建築 - ジググラト -

都市国家 世界帝国：シュメール人(ウルなど) アッカド人 バビロニア王国 ヒッタイトなど アッシリア

新バビロニア王国・メディア王国・リディア王国(クロイソス) アケメネス朝ペルシア アレクサンドロス大王

宮殿建築 サルゴン2世宮殿(ア)、バビロン市門(新バ)、ペルセポリスの宮殿跡・百柱の間(ペ)

宗教建築 ジググラト(バベルの塔)

エジプト建築への影響・・・「王宮ファサード」とよばれる凹凸周壁

2.古代エジプト建築 - 大ピラミッドとカルナック神殿 -

先王朝時代、初期王朝時代、古王国、第1中間期、中王国、第2中間期、新王国、第3中間期、末期王朝時代

貴族墳墓(マスタバ) ネテリクヘト(ジェセル)王のサッカラ葬祭建築複合体= 階段ピラミッド(イムヘテブ)

スネフェル王のピラミッド群(メイドゥムのピラミッド、屈折ピラミッド、赤ピラミッド= 四角錐形の確立)

ギザの三大ピラミッド(クフ、カフラー、メンカウラー)= 構造の変化、用途は不明(公共事業説もあり)

神殿建築 パイロン(塔門)、中庭、多柱室、至聖所 奥へと狭まる、植物に想を得た柱、ヒョク'リ(聖刻文字)

ハトシェプスト女王葬祭殿、カルナック神殿、ルクソール神殿、ラムセウム(ラムセス2世)、アブシンベル神殿

プトレマイオス朝、属州時代へ継承= フィラエ・イシス神殿、エドフ・ホルス神殿、デンデラ・ハトホル神殿

宮殿建築 世俗建築は日乾煉瓦 第18王朝アメンヘテブ3世のマルカタ王宮 寝室天井画に真実の女神